

日薬ヒット 医薬ビジネス発展

家康肝いり「江戸おおもと」の地集まった同業者

オフィスビルの間を真つすく
な道が通る。さほど広くはな
い。付近に勤める人だらうか、
ときおり現れてはゆったりと歩
いていく。すし足延ばせば



「お江戸日本橋亭」もあ
る。ビジネス街だが、時間が穏
やかに流れるようにも感じる。
東京都中央区日本橋本町。
本町通りが東西に横切る。徳川
家康が1590（天正18）年、
江戸に入って真つ先に町割り
を始めた地域だ。最初に開かれ
た「江戸のおおもと」の町、すな
わち本町と呼ばれた。道や運河
を縦横に張り巡らせ、物流の拠
点として育てていく。「地形を
深く読み込み、その特性を踏ま
えて都市に必要な機能を合理的
に配置した結果、商業の中心に
ふさわしいのが日本橋だったの
ではないか」と、日本大学の阿
部貴弘教授（都市史）は話す。

各地から商人や職人が移って
きたが、同業者は集まって住む
ように定められた。薬種店は3
丁目付近。江戸時代には日本古
来の和薬、輸入した唐薬、医療
用の器具を扱う店などがあっ
た。本町通りは江戸城の門につ
ながる常盤橋と中世以来にきわ
る浅草を結び、有数の目抜き通
りに発展した。

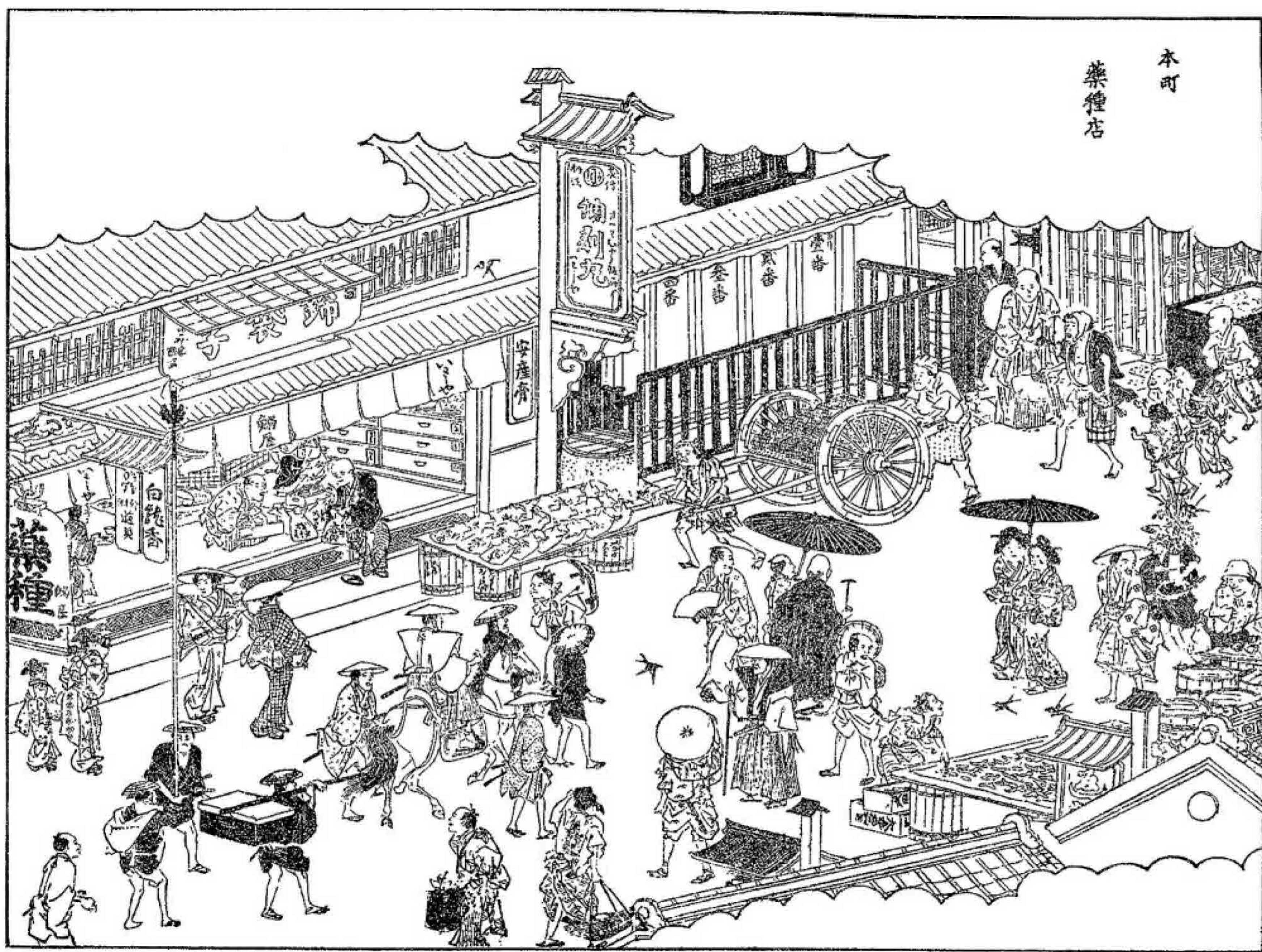
はやり、目薬「益田五靈膏」が
人気に。巨利を得たという。東
京薬事協会「百年史」による
と、3丁目はのちに川柳で「三
丁目句はぬ見世が三四軒」とう
たわれる。薬の原料となる草根
や木皮が発する独特においが
周囲に漂っていたのだらう。
薬種店から卸売りを手がける
薬種問屋が生まれ、共存共栄を
めざす同業者組合が結成され
た。幕府は1722（享保7）
年、和薬を検査する和薬改会所
を設置。これに伴って、江戸で
は組合に和薬の検査や、地方の
生産者などの取引の独占権を
与えた。本町に、関東の薬品取
引がいつそう集中していく。

組合の1人が松本市左衛門。
「いわしや」を営む。寛永（1
624〜44年）のころ本町に出
店したとされる。江戸後期に刊
行された地誌「江戸名所図会」
には、多くの人が行き交う通り
に面した店の様子が描かれた。
下痢などに「調痢丸」、毒消し
に「錦袋子」、切り傷に「白龍
香」。各種商品の看板も見え
る。繁盛しているようだ。

本社はずっと本町にあり、グル
ープ全体では世界で約2500
人の従業員がいる。本町につい
ては医療関連の企業が集まるこ
とで「情報共有などでメリット
がある半面、競争がさらに激化
する。製品の差別化がより重要
になってくる」（謙一さん）。



本町通りを昭和通り側から眺める。正面奥に見える建物は日本銀行本店の新館。いずれも東京都中央区



「江戸名所図会」に描かれた「本町薬種店」。店頭で座っているのは客だろうか。東京薬事協会「百年史」から



サクラグロホールディングの松本謙一会長。いわしや創業者の久左衛門から数えて17代目だ

「本町通り」に刻まれた石碑。右奥は第三共の施設「Daitchi Sankyo」の「ローション」



日本橋本町の薬業界が崇敬の念を表す薬祖神社。後ろに見えるのは武田薬品工業グローバル本社



だが、にぎわいの中心はいつ
しか、日本橋から南北に延びる
中央通りに移った。1923
（大正12）年には関東大震災が
起き、本町も壊滅的な打撃を受
ける。復興に向けて、政府は町
の名称や区域の変更を含む区画
整理に乗り出す。
本町も対象となったが、いわ
しやの松本家当主は「薬種問屋
と言えは本町であり、薬業の中
心が本町となるよう境界線を引
いてほしい」と訴えた。松本家
の子孫、謙一さん（85）によれ
ば、願いはある程度聞き入れら
れたという。
ただ町の形などは変わった。
「医薬の祖神」とされる2神を
まつる薬祖神社が6年前に移っ
た先は隣町の日本橋室町だ。
謙一さんは医療機器や、がん
の免疫診断薬を手がけるサクラ
グロホールディングの会長を務
める。この会社は、いわしやが
売薬規制を受けて187
1（明治4）年に独立させた医
療機器の販売部門が始まりだ。

戦後に中央区が誕生すると、
本町の名は日本橋本町に変わっ
た。武田薬品工業、アステラス
製薬、第一三共といった大手製
薬会社が本社を構えるのは同じ
だが、ここ数年は違う顔も見せ
つつある。国内外の産官学が知
恵や技術を持ち寄り、医薬品の
周辺分野を対象を広げたライフ
サイエンス（生命科学）で新た
な事業を生み出そうと挑む。
交流イベントなどを主催する
ライフサイエンス・イノベーション・ネットワーク・ジャパン
では「製薬会社の集積も生か
し、日本橋からライフサイエン
ス産業の活性化につなげていき
たい」。くすりの町は時間の流
れが穏やかに感じられても、変
化を止めないのだらう。（江島俊彦）